

ASOで四肢切断した症例の検討

角館朱里、近江 薫、保阪るり子、五十嵐伴子

宮形 滋*、原田 忠*、木暮輝明*

中通総合病院 血液浄化療法部、同 泌尿器科*

<はじめに>

近年、透析患者の四肢の閉塞性動脈硬化症（以下 ASO）は増加傾向にあるといわれている。当透析室では平成12年からフットケアを開始してきたが、ASOにより四肢切断に至った症例がこの間6症例あった。今後のより良いフットケアにつなげるために、各症例の背景を検討した。

<症例の背景>

症例A（図1）は、糖尿病（以下 DM）を合併しており、脳梗塞の既往もあった。白癬で皮膚科フォローされていたが、左第5趾痛から潰瘍形成、感染を繰り返し、初診時から6ヶ月で左下肢切断に至った。

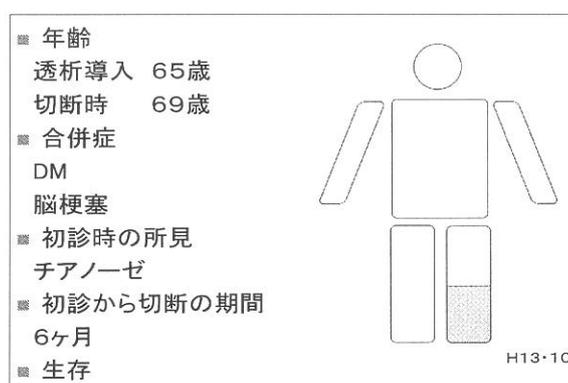


図1. 症例A（男性）

症例B（図2）は、透析歴が9ヶ月と短く年齢も若かったが、導入時からPTAが不可能なほどの下肢動脈狭窄があった。DMを合併しており、血糖コントロールも不安定であった。両足の陥入爪があり皮膚科でフォローしていたが、皮膚科での指示を無視し、誤った自己判断で爪の処置を行い、度々炎症を起こしていた。また、透析室での創処置も拒否的であった。その結果、初診から6ヶ月後、左母趾切断し、まもなく左第5趾に潰瘍形成し、感染を合併したため、初回切断より10ヶ月後に左下肢切断に至った。

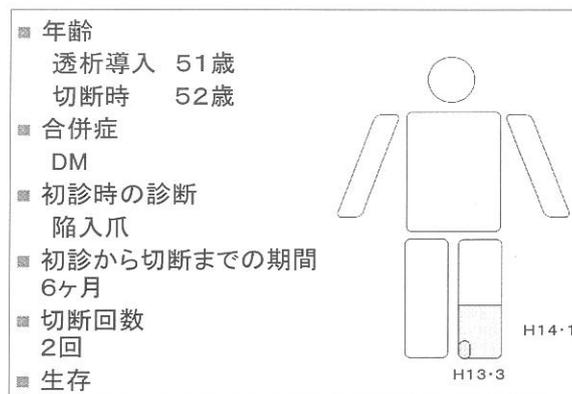


図2. 症例B (女性)

症例C (図3) は、DMを合併しており、血糖コントロールが不良で視力障害と神経障害が高度であった。1人暮らしであり、視力障害のため度々転倒をしていたが、外傷があっても痛みなどの自覚症状がないため、発見が遅れがちであった。転倒によるびらんから5ヶ月後、左母趾切断し、その18ヶ月後右足趾の壊死が急速に進み右下肢切断に至った。8ヶ月後には右手にも虚血性変化が出現し、右前腕の切断、3ヶ月後に左下肢も切断と、感染、創治癒遅延、再発の繰り返しで、頻回の切断となった。

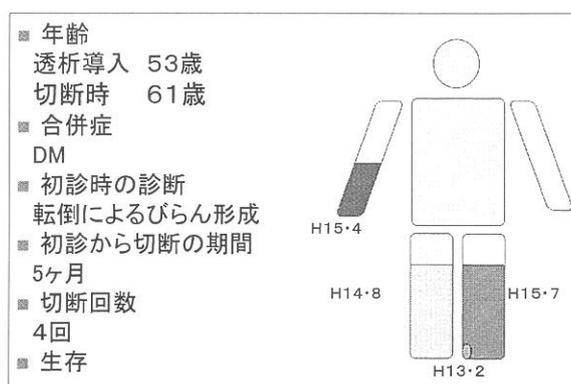


図3. 症例C (女性)

症例D (図4) は、DM、完全房室ブロックを合併し、ペースメーカーの植え込みがされている。血糖コントロールが不良なほか、体重増加も多く病識がないなど自己管理不良であった。右足趾の痛みから潰瘍、壊死へと進展し、6ヶ月後には足趾の切断となり、その2ヶ月後、再壊死により下肢切断となった。初回切断から2年6ヶ月後心不全により死亡した。

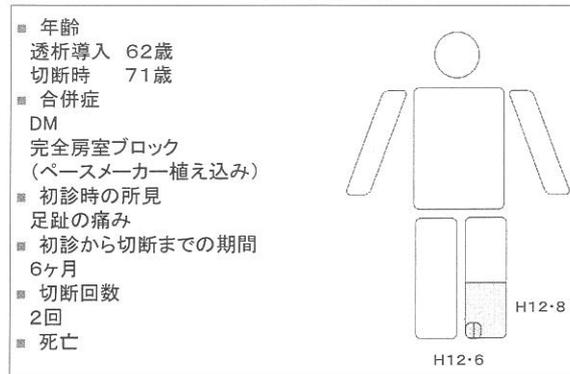


図4. 症例D (男性)

症例E (図5) は、DM、狭心症を合併している。血糖コントロールが不良で、透析間の体重増加も多く、透析中の血圧下降が著名であった。深爪から感染、骨髓炎へと急速に悪化し、初診から1ヶ月後に右大腿切断に至った。そして、切断から3ヶ月後には全身状態の悪化により死亡した。

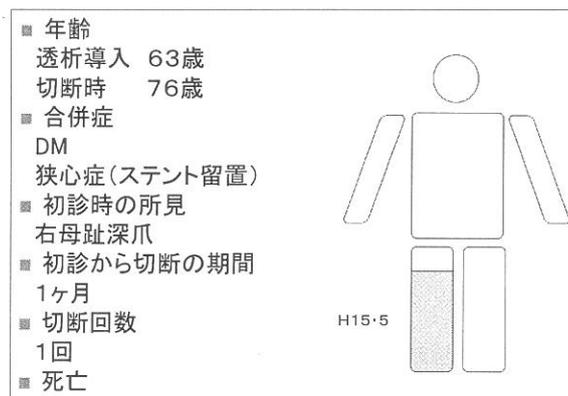


図5. 症例E (女性)

症例F (図6) は、DMを合併しており、血糖コントロールが不良で視力障害、神経障害も伴っていた。右環指のあかぎれ様の発赤から潰瘍を形成し、5ヶ月後右環指切断となり、その8ヶ月後には心不全により死亡した。

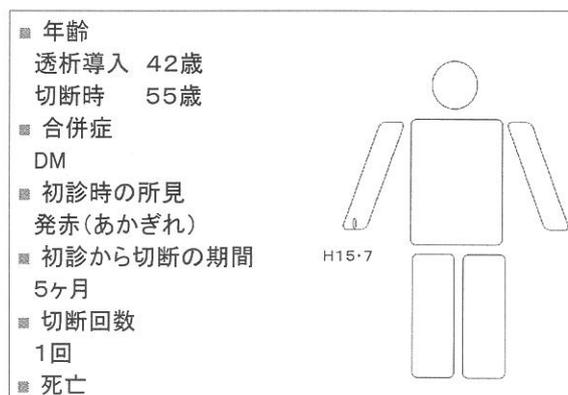


図6. 症例F (女性)

<結果>

ASOで四肢切断に至った6症例ともDMを合併していた。初診時の所見は深爪や爪周囲炎、外傷、痛みであり、初診から四肢切断までの期間は1～6ヶ月と非常に短かった。

切断回数は1回が3例、2回が2例、4回が1例であった。下肢の切断が4例、上肢の切断が1例、上下肢の切断が1例であった。

四肢切断後は、3ヶ月～2年10ヶ月で3症例が死亡しており、予後は不良であった。

<結論・結語>

今回ASOで四肢切断に至った6症例の背景を調べた結果、DMを合併しているASO患者は些細なきっかけから急速に感染、壊死を繰り返し、切断にいたる事が分かった。その原因には動脈硬化、血糖コントロール不良、神経障害、感染、虚血など複雑に絡み合っていると考えられた。また複数回切断に至った症例もあり、ASOは手術や切断を施行しても根本的な治療が困難であり、再発率も高くなると考えられた。

現在、当透析室では独自の足カルテを用いて、維持透析患者の定期的な観察やASO患者に対する足浴、ポスターなどによる指導を行っている。また、年に一度ABI、PWVを行っているが、今後ますますASO患者は増加すると考えられるため、透析導入時からの定期的な検査や指導を組み入れ、異常の早期発見や早期治療に努める必要がある。指導に関しても実際に四肢切断した症例の紹介を混じえるなど、患者の意識付けを高める具体的な方法を検討していきたいと考えている。また、上肢の切断が2例あり、フットケアとして下肢にばかり注目しがちだったが、これからは上肢のケアに関しても積極的に行っていく必要があるとも考えている。